



Title	『アジアの在来家畜—在来家畜の起源と系統—』 在来家畜研究会〔編〕（名古屋大学出版会，2009年，461頁，9,975円）
Author(s)	大館，智氏
Description	書評
Citation	哺乳類科学，50(2)，243-244
Issue Date	2010
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44601
Type	article
File Information	50_243_244.pdf



れぞれには、ウシ、スイギュウ、ウマ、ブタ、ヒツジ、ヤギ、イヌ、ネコ、ニワトリ、アヒル、ウズラ、ジャコウネズミが当てられている。家畜とはいふものの、このうちの3種は家禽であり1種は実験動物のスクス(ジャコウネズミ)である。最後の実験動物スクスをアジア在来家畜に含めるのはやや難があるが、実験動物もヒトの役にたつ家畜なのだとすることをアピールするには良い試みである。

第II部では、様々な遺伝的情報を用いて家畜の起源を推定しているが、この研究例をみれば、品種間および原種と家畜間の遺伝的線引きが、いかに難しいかが分かる。ほとんどの家畜では、形態に基づく品種と遺伝的グループに1対1の関係は見られず、その対応は複雑に入りこんでいる。それどころか原種(あるいは近縁種)の遺伝的な流入が認められるケースもあり、家畜の起源を一つあるいは少数系統に特定することはできない。そもそも、家畜の各品種および原種は生物学的に「同一種」であるし、育種のために意図的に交雑を行ってきたから当然であろう。程度の差こそあれ、家畜のほとんどは多起源であることは第II部から明らかである。

また家畜と原種(あるいは近縁種)とされる野生動物が同一地域に共存する例としてアジア東部では、ウシと野生 *Bos* 属の数種、イヌとオオカミ、ブタとイノシシ、ニワトリとセキショクヤケイ、アヒルとマガモ、家禽ウズラと野生ウズラがあげられる。これらの野生原種を研究対象にする場合、家畜種からの遺伝子流入も考慮に入れなくてはならず、その系統地理学的な研究はとても厄介である。特に日本ではオオカミとイノシシを研究する場合、それぞれイヌとブタの影響が潜在的にあり、分析結果の解釈は慎重を要するであろう。

このように、家畜のほとんどは複数品種(時によっては原種)の遺伝的影響を受けている。となると、そもそも「アジア在来」家畜とはなんであろうかという素朴な疑問がでてくる。第I部1章において、在来品種とは、ローカルに存在し、グローバルな影響を受けていない品種、と定義されている。アジアには中近東も含まれているので、アジア在来とはヨーロッパ(+移民先のアメリカ)で確立された品種の影響を受けていない品種のことを示すと思われるが、ユーラシア(+アフリカ)は連続しているのでアジア品種とヨーロッパ品種の間には元々なんらかの遺伝的交流が存在すると考えられる。従って、「在来」をあまり厳密に定義しないほうが無難だろう。そして、在来品種の保存を考える際の純血度の定義は、社会的必要性とニーズによって決められるべきものであろう。なぜなら、在来家畜といえども、大なり小

なりに外部の血をいれて成立してきたのだから。同様に、野生動物の保全を考えた場合、自然状態でも個体群の遺伝的構成は刻一刻と変化していることに注目する必要がある。何を保全の単位、対象とすべきかという問題には、明確な遺伝的・形態的な線引きは“生物学的”にはさほど意味がない。保全の単位は、絶滅寸前の地域個体群の保全、他の個体群(亜種)からの再移入、他の種や家畜、系統からの遺伝汚染の除去などの問題を扱うときに重要な論点となる。人間活動によって遺伝的構成が変化させられてしまうのと、“自然に”変化することに本質的な違いを見るかどうかは、人間の判断による。言い換えれば、在来家畜や、“自然”個体群、“種”の保全は、「ヒトによるヒトの為」の営為であるから、保全すべき単位は、必要とする人のコミュニティが定義すべき問題であろう。

本書により、読者は人間と野生動物を繋ぐクッションとして家畜の重要性を再確認するであろう。野生動物だけでなく家畜も面白い研究対象である。

大舘智氏(北海道大学低温科学研究所)

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp

『モグラ博士のモグラの話(岩波ジュニア新書)』

川田伸一郎 [著]

(岩波書店, 2009年, 210頁, 819円),

『モグラー見えないものへの探求心』

川田伸一郎 [著]

(東海大学出版会, 2010年, 210頁, 2,100円)

この2冊のうち、「モグラ博士のモグラの話(以下、モグラ博士〜)」には著者の川田伸一郎氏がモグラ博士になるまでのバイオグラフィーと、モグラとはどんな動物なのかのわかりやすく書かれ、「モグラ 見えないものへの探求心(以下、モグラ〜)」にはモグラ研究を通したフィールドワークの貴重な体験談とその成果が描かれている。これから大学へ進学しようと考えている受験生や、大学入学したばかりの初学者には是非読んで欲しいが、現職の研究者にとっても、将来への大志を心に抱いた頃が鮮やかに蘇るものになると思う。

そもそも何故モグラが研究材料なのか? こんな疑問に答えるために、「モグラ博士〜」ではモグラが持つ様々な特徴が記されている。モグラは日本に何種類いるのか? モグラは光にあたると本当に死ぬのか? モグラはどうやってトンネルを掘るのか? こんな素朴な疑問こそがモグラの進化を考える上で重要なキーなのである。モグ